

食べ物の名付けについての認知意味論の一考察 「タコ焼き鶏肉入り」を中心に

An Analysis on Naming Some Japanese Foods within the Framework through the Cognitive Semantics

藤原 正道
Masamichi Fujiwara

要旨

本論の目標は、認知意味論の枠組みを使って、いくつかの日本の食べ物の名付け（ネーミング）の背景にある認知と意味構造を明らかにすることである。食べ物とその名前にどのような関係があるのか、食べ物の特徴のどの部分に光を当てて、我々は名前をつけるのかを議論、分析し、「タコ焼き」「おにぎり」「あんパン」などの食べ物の名前の背景にある認知と意味構造を明らかにする。本論では、プロトタイプやスキーマ、メタファーといった認知意味論の概念を理論的基盤とする。

1 はじめに

「タコ焼き鶏肉入り」と聞くと、どのような食べ物を想像するだろうか。蛸（の肉）と鶏肉が同時に入ったものであろうか。蛸の代わりに鶏肉が入った食べ物であろうか。蛸と鶏肉が同時に入っていないければ、「タコ焼き鶏肉入り」を容認可能としない人と、鶏肉のみで蛸が入っていても「タコ焼き」だと認知する人がいるのはなぜだろうか。

本論では、プロトタイプ (prototype) やスキーマ (schema)、メタファー (metaphor) といった認知機能を取り上げ、「タコ焼き鶏肉入り」を中心としたいくつかの日本の食べ物の名付け（ネーミング）と意味、認知機能との関連を分析していく。

2 認知言語学の前提

食べ物の種類は無数にあり、その名前も無数に存在する。同じ食べ物でもそれぞれの言語によって様々に名付けられ、それぞれの文化を背景にそれぞれの視点に基づき名付けが行われている。ネーミングには、我々の持つ認知能力が色濃く表れていると言える。

2.1 プロトタイプとスキーマ

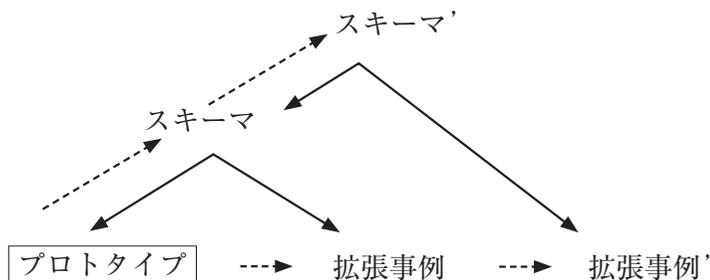
辻編 (2013)によると、プロトタイプとは「カテゴリー(category)における代表的成員のことを指す」。つまり、そのモノの持つ代表的な特徴の集合体のことである。さらに「カテゴリーはプロトタイプを中心にした内部構造を持ち、帰属において勾配を持った成員が放射状に配列される (=放射状カテゴリー)」。すなわち、代表的な特徴を全て持たない事例は、そのカテゴリーで成立しないのではなく、代表的な特徴をより多く持つ事例を中心に、特徴がより少ない事例は周辺的な事例として人は認識するということである。

例えば、我々は「空を飛ぶ」という鳥の代表的な特徴を持たないからと言って、ダチョウやペンギンを鳥ではないと認識したり、分類したりしない。ダチョウやペンギンは、鳥の他の特徴であるクチバシや羽を備えているので、空を飛ばなくても周辺的な成員として鳥だと認識するのである。

一方、スキーマとは「より概略化されて詳細が省略された意味や抽象構造のことを指し、プロトタイプとそこからの拡張事例の共通点のみを取り出した物がスキーマで、スキーマを精密化していくとプロトタイプになる」。

Langacker (2008)によると、それらは次の(1)のようなネットワークを成立させている。プロトタイプからスキーマへの矢印は、意味の拡張を示し、スキーマからの矢印は意味の精密化を表している。このようにスキーマはプロトタイプからの拡張でもある。我々は、このようなプロトタイプとスキーマの相互関係性全体を知識として持ち、意味を広げていくⁱ。

(1)



3 観察と分析

3.1 タコ焼き

実物の「タコ焼き」のプロトタイプの特徴は、小麦粉を水で溶いた生地の中に蛸やネギ、紅ショウガ等の具材を入れて、丸くボール状に焼き、ソースやマヨネーズ、青のりや鰹の削り節を上にかけて食べ物である。外見が蛸に似ていることからのネーミングではないことは明らかで、「イカ (の姿)焼き」や「メロンパン」などの見た目の特徴を中心にした名付けとは異なる^{ii/iii}。

例えば、「メロンパン」は丸い形や焼き目の模様や色などが、(マスク)メロンの外見に似ているところから名付けられたとすると、この場合はメタファー(隠喩)によるものと分析できる。

認知言語学でいうメタファーとは、ある概念領域を別の概念領域への写像と捉えて理解する認知作用であり、小説などに見られるような特別な表現技巧だけでなく、広く日常に浸透し、2つの概念領域は人の経験を基盤に相関関係を示すと捉える。例えば、

(2) 彼女は歌手としてなかなか芽が出なかったが、不断の努力が実を結び、大輪の花を咲かせた。

という例では、「人間」と「植物」がともに成長するという特徴、つまり幼児期と「芽が出る」、努力の成功と「実を結ぶ」や「花を咲かせる」という類似点を経験から得て、両者を結びつけたメタファーである。「メロンパン」では、(2)よりも少し単純に外見の類似性のみがネーミングに用いられているに過ぎない^{iv}。

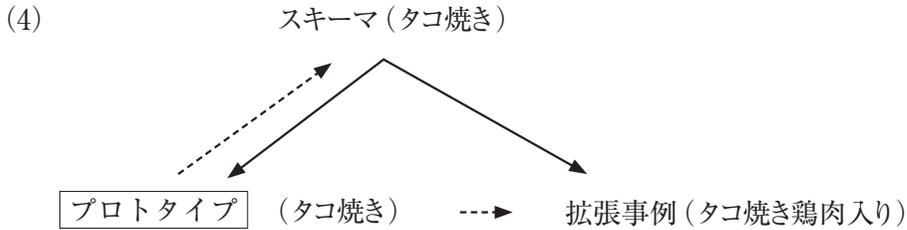
さて、「タコ焼き」のネーミングではその特徴の中でも、具として中に入っている蛸を中心的特徴として名付けていることから、蛸が「タコ焼き」にとって最も重要なプロトタイプの要素であり、外観の形や色、上にのせるソースや青のりなどは蛸よりは周辺的な要素となる。このことは「タコ焼きタコなし」や「タコ焼きタコ抜き」と聞いて冗談かと思う人が少なくないことから、「タコ焼き」のネーミングそして、実際の食べ物としての「タコ焼き」にとって、蛸が最も重要な要素であることがわかる。

したがって、「タコ焼き鶏肉入り」という表現を見たり聞いたりすると、我々の頭の中では、まず「タコ焼き」のプロトタイプの特徴の蛸が代表的特徴として認知され、その「タコ焼き」の中に鶏肉も加えられていると認識されるのが、一般的ではないだろうか。

今回は18-20才の女子学生限定となるが、102名に「タコ焼き鶏肉入り」と聞いて、あなたはどんな食べ物を想像しますか?と質問したところ、以下の結果となった。

(3) a 蛸と鶏肉の両方が入った食べ物	79名	77.5%
b 蛸の代わりに鶏肉だけが入った食べ物	23名	22.5%
c その他	0名	0%

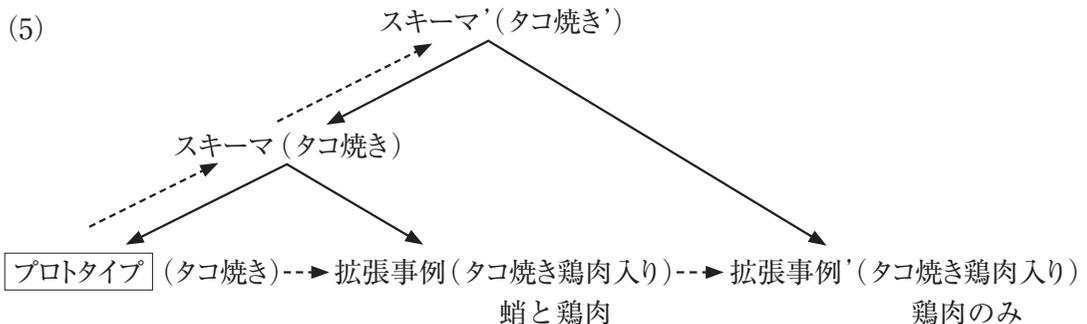
(3a)の結果は、上記の仮説を裏付けるものだと言える。上記の仮説を(1)のネットワークモデルに当てはめてみると、次の(4)のようになる。



プロトタイプの特徴を持つ「タコ焼き」から意味拡張して、「タコ焼き鶏肉入り」が成立している。

しかしながら一方、(3b)と答えた人の中ではどういう認知機能が働いているのであろうか。(3b)の蛸の代わりに鶏肉だけが入った「タコ焼き」を思い浮かべた人の頭の中では、おそらく「タコ焼き」のプロトタイプの特徴として、外見の特徴である丸い形や小麦粉を水で溶いた生地が代表的特徴として前面に出て中心的な特徴となり、蛸は二次的要素となる。そうすると、「タコ焼き」の中の具材は特に蛸である必要はないので、その代わりに「鶏肉」だけの「タコ焼き」でも容認可能となる^v。

プロトタイプである代表的特徴項目の入れ替えが行われることによって、元々のネーミングが持っていた特徴は、形骸化してしまったことになる。これらのことは、(5)のように図式化できる。



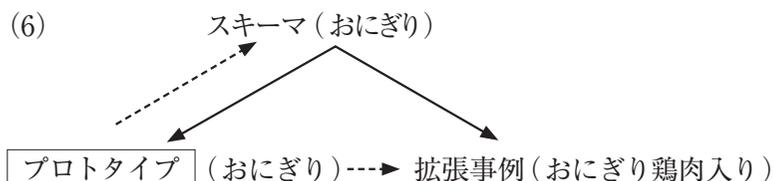
(5)の「スキーマ'」では、丸い形などの外見の特徴が「タコ焼き」の中心的意味となり、蛸が入った食べ物という特徴は、二次的になっている。

3.2 おにぎり

「おにぎり」の場合、「タコ焼き」よりも容易に「おにぎり鶏肉入り」が容認可能となると推測できる。ご飯を握った物の中に(生ではない調理した)鶏肉が入っている食べ物と認識する日本人が大多数であろう。なぜならば、「おにぎり」は中の具が何であれ、ご飯を握って三角形や俵形に整えてある食べ物という特徴がネーミングの由来であるからだ。

「タコ焼き」の場合と異なり、外見的特徴であるご飯を握っていることがプロトタイプの特徴となっているので、具は「おにぎり」のネーミングにとって二次的な要素となっている。「おにぎり具なし」が「タコ焼きタコ抜き」より容認可能性が高いのがその証拠である^{vi}。

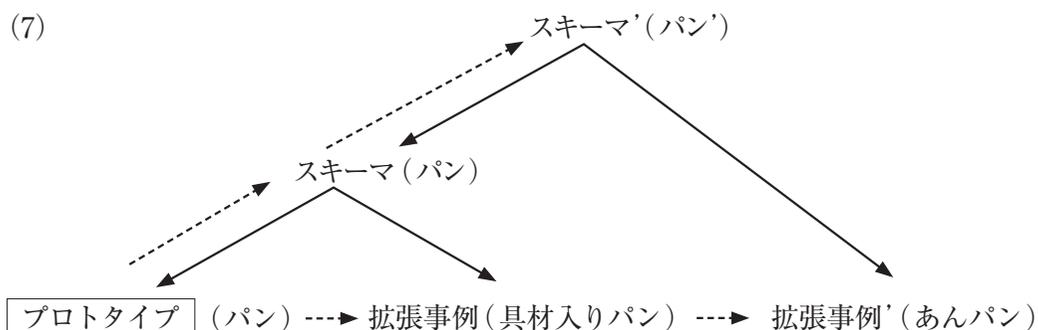
以上の分析は、(6)のように図示することができる。(5)と比較すると、意味の拡張が一段少なくなっている。



3.3 鯛焼き・あんパン

では、「鯛焼き」はどうであろうか。「鯛焼き」は鯛の形の類似性からのネーミングである。同じ材料の生地を使って焼き、同じように餡子は入っているが、鯛の形をしていない物は「大判焼き」や「回転焼き」と呼ばれることや、「鯛焼きチョコクリーム入り」や「鯛焼きチーズ入り」が容易に容認可能であることから「メロンパン」のように外見のみが中心的特徴かと思われがちである。しかし、一方で「鯛焼き餡子抜き」を容認するのは困難なことから、実物の「鯛焼き」のプロトタイプの特徴には具材も含まれていることがわかる。そうすると、ネーミングは外形的特徴に依存するが、実際の食べ物のプロトタイプの特徴としては、具材まで含まれることになり、「タコ焼き」とは異なった実際の食べ物とネーミングとの関係性を持つことになる。

さらに「あんパン」を取り上げると、「あんパン」や「クリームパン」は「パン」の中でも中心に具材の入っている種類なので、「パン」のプロトタイプの特徴から少し周辺的かまたは拡張事例として認識され、(6)の「おにぎり」のネーミングの場合より、もう一段階広がった次の (7) のような意味の拡張が見られる。



しかしながら、「あんパン」は具材の餡子の種類によって拡張事例が制限され、ネーミングの広がりも限られる。一方、「おにぎり」や「鯛焼き」は外見的特徴にネーミングが由来しているので、具材の種類によって無数に拡張事例が広がり、ネーミングも拡大する^{vii}。

3.4 タコ焼きアイス

上記の(3)の質問をする時に別の内容も尋ねてみた。「タコ焼きアイス」と聞いて、あなたはどんな食べ物を想像しますか?という内容である。結果は以下のとおり。

- | | | |
|--------------------------------------|-----|-------|
| (8) a 蛸が入っている丸い形の(何かの)生地で包まれたアイスクリーム | 53名 | 52% |
| b 特に何も入っていない丸い形の(何かの)生地で包まれたアイスクリーム | 30名 | 29.4% |
| c その他 | 19名 | 18.6% |

これらの結果は、実際の食べ物としての「タコ焼きアイス」のプロトタイプの特徴が、多くの人に共有されていないことの表れだと言える。「タコ焼き鶏肉入り」と異なり、「アイスクリーム」と「タコ焼き」という類似性の少ないものを結びつけようとする認知作業が必要となる。少ないながらも、実際の食べ物どうしのどこに類似性を見つけたかがネーミングの鍵となる。

(8a)の回答者は、実際の「タコ焼き」の中心的特徴である蛸が一次的特徴としてネーミングに生かされていると認知し、アイスクリームの中に蛸が入っていると想像したようである。「タコ焼き」のプロトタイプの特徴からの拡張事例と言える。

一方で、(8b)の回答者の頭の中では、蛸とアイスクリームという食べ物が経験上結びつかず、「タコ焼き」とアイスクリーム外観的特徴の類似性に焦点が当てられたのであろう。(8b)の回答者の中では、チョコレートを「タコ焼き」のソースに見立てることなども容易に想像できる。

さらに(8c)では、「タコ焼き味のアイス」という回答例も4件存在した。これらは「アイスクリーム」のプロトタイプからの周辺事例か、拡張事例だという認知判断であろう。

「タコ焼きアイスクリーム」のように、我々にとって見たり食べたりする経験がやや乏しい食べ物の場合は、それぞれ各個人がばらばらな特徴のスキーマを持つことになり、プロトタイプ的な特徴を描くことや獲得することが困難となる。もちろん他人との(百科事典的)知識の共有も難しい。ネーミングはある意味、実際の事物のプロトタイプの特徴を他人と共有することでもあるので、「タコ焼きアイスクリーム」は知識として共有されず、さらにまだ定着していないことになる。

4 まとめ

以上のように認知意味論の理論的枠組みの中で、「タコ焼き」「おにぎり」などいくつかの食べ物のネーミングについて考察を加えてきた。

その結果、プロトタイプとスキーマのネットワークやメタファーを利用すれば、ネーミングと実際の食べ物との背景にある認知と意味的構造の関係が明らかにできることがわかった。このことは、日本語話者のネーミングについての認知能力のある側面を明らかにしたことになるので、日本語話者でない人々に対する日本語教育への発展も期待できる。

参考文献

- 窪蘭晴夫 (2008) 『ネーミングの言語学: ハリー・ポッターからドラゴンボールまで』 開拓社.
- Lakoff, George (1987) *Woman, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, Chicago Univ. Press. (池上嘉彦他訳『認知意味論』紀伊國屋書店)
- Lakoff, George & Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*, The Univ. of Chicago Press. (渡部昇一他訳『レトリックと人生』大修館書店)
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A basic introduction*, Oxford Univ. Press. (山梨正明監訳(2011)『認知文法論序説』研究社)
- 佐藤信夫 (1992) 『レトリック感覚』講談社学術文庫.
- 佐藤信夫 (1992) 『レトリック認識』講談社学術文庫.
- 佐藤信夫 (1993) 『レトリックの記号論』講談社学術文庫.
- 瀬戸賢一 (1995) 『メタファー思考』講談社現代新書.
- 辻幸夫編 (2013) 『新編認知言語学キーワード事典』研究社.

注

- i 辞書的な定義としての知識ではなく、百科事典的な知識である。
- ii 大阪名物として有名な「イカ焼き」は、「お好み焼き」に似た生地のスルメイカなどが入った食べ物なので、本論で扱う「タコ焼き」のネーミングと同じ認知能力が働いていると考えられる。
- iii 子供がほほの肉を人差し指と親指を使って丸く握りだして、「タコ焼き!」と喋ってふざけることが容認可能な理由は、大きさや色などの外観が単純に似ていることによるもので、ここではタコ焼きの外観的特徴の類似性に基づいたネーミング機能が働いている。
- iv 関西や中国地方の一部の地域では円錐形（アーモンド形）のメロンパンのことを「サンライズ」と呼ぶ。メロンの亜種である「マクワウリ」の形にその由来があるとされている。
- v 家庭で「タコ焼き」を作る場合など、蛸（の肉）以外にいろいろな具材を入れて楽しむことが容易に想像できる。そのような経験を通して、我々の認知が成立しているので、(3b)と答えた人は蛸が入っていない「タコ焼きチーズ入り」や「タコ焼きチョコレート入り」も容認可能となると予想される。
- vi 具の入っていないおにぎりは「塩結び」という別のネーミングが与えられている。「塩結び」が「おにぎり」のプロトタイプとなるかどうかは微妙なところであろう。「のり」のついていない「おにぎり」を中心的特徴とする人が多いようにも思われる。
- vii 「鯛焼き」の生地が薄い「薄皮鯛焼き」や、クロワッサンのような「クロワッサン鯛焼き」など外見の生地の特徴がネーミングに表れる事例も出てきている。

Abstract

The aim of this paper is to clarify the semantic structures of naming some Japanese foods such as 'Tako-yaki', 'Onigiri' and 'An-pan'. My analysis is based on the framework of the cognitive semantics, especially, prototype, scheme and metaphor. I apply these ideas to the analysis of the naming some Japanese dishes and discuss how we give names to them.